

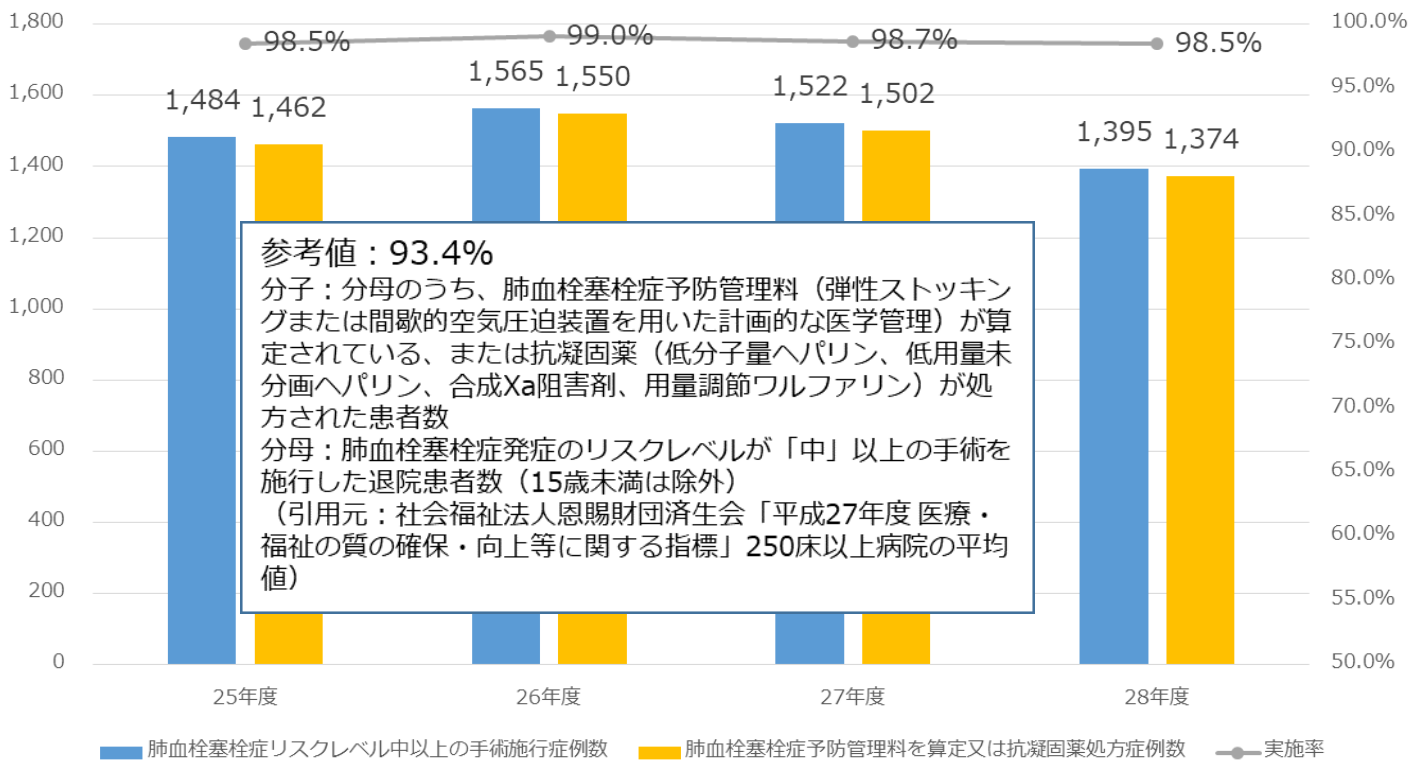
37 手術あり患者における肺血栓塞栓症予防対策実施率(リスクレベル中以上)

指標の解説

- 肺血栓塞栓症は、血栓の大きさや血流の障害の程度によって軽症から重症までのタイプがある。血栓によって太い血管が閉塞してしまうような重篤な場合には、肺の血流が途絶し、酸素が取り込めなくなり、ショック状態から死に至ることもある。
- 近年、深部静脈血栓症や肺血栓塞栓症の危険因子が明らかになってきており、発症に至る前に、危険レベルに応じた予防対策を行うことが一般的に推奨されている。
- 予防方法には、静脈還流を促すために弾性ストッキングの着用や間歇的空気圧迫装置(足底部や大腿部にカフを装着し、空気により圧迫)の使用、抗凝固療法があり、「肺血栓塞栓症/深部静脈血栓症(静脈血栓塞栓症)予防ガイドライン」に則り、肺血栓塞栓症発症のリスクレベルが「中」以上の手術を施行した症例が対象になる。

分子：肺血栓塞栓症予防管理料算定又は抗凝固薬処方症例数

分母：肺血栓塞栓症リスクレベル中以上の手術施行症例数



リスクレベルのある手術に対しては、ほぼすべての患者に予防対策ができており、過去4か年の実施率も高値を維持している。